

機関番号：13101  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20520280  
 研究課題名(和文) ドイツ近代文学における庭園モチーフの研究  
 研究課題名(英文) Die Untersuchungen über das Gartenmotiv in der deutschen neueren Literatur  
 研究代表者  
 桑原聡(KUWAHARA SATOSHI)  
 新潟大学・人文社会・教育科学系・教授  
 研究者番号：10168346

## 研究成果の概要(和文):

ノヴァーリスからパウル・シェアバルトに至るドイツ近代文学における庭園モチーフにおいては自然と人工の対立が問題になることはよく知られている。一般にドイツ・ロマン派に始まる人工庭園の系譜(たとえばE.T.A.ホフマン)は、芸術の象徴としてS.ゲオルゲに極まると関連研究は指摘している。しかし、本研究は、ドイツ近代文学における人工庭園のモチーフには二種類あり、一つは芸術の象徴としての庭園であり、もう一つがユートピア(=楽園)としての人工庭園の系譜であることを解明した。後者がノヴァーリスからシェアバルトに至る系譜であり、その指標が「光」にあることを明らかにした。

## 研究成果の概要(英文):

It is well-known that the contrast between nature and art had been much discussed in the German literature regarding to the garden-motif from Novalis to Paul Scheerbart. The research about this theme says generally that the genealogy of art-gardens begins with the German romanticism to end with Stefan George who used the literary building of the garden for example in his "Algabal" as a symbol of the art. My research however shows that there are two genealogies of the literary garden-motifs in the German literature from the romanticism: the one is the way of George, and the other symbolizes the paradise and leads from Novalis to Paul Scheerbart.

## 交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	400,000	120,000	520,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

## 研究分野:文学

科研費の分科・細目:ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード:イギリス風景式庭園、人工庭園、ノヴァーリス、シェアバルト、芸術の象徴としての庭園、ユートピアのアレゴリーとしての庭園、自然、神秘主義

## 1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパ庭園に関する文化史的研究

はここ20年ほど盛んになりつつある。と

りわけバロック整形式庭園に対する反動として18世紀イギリスにおいて成立したいわゆる「イギリス風景式庭園」に対する関心が大きい。その背景には庭園が自然と人工が交わる場所であるという認識が働いている。周知の如く、イギリス風景式庭園ではたんに自然が模倣されるのではない。クロード・ロラン、ブッサン、サルヴァトール・ローザの風景画に影響され、その風景を庭園に再現しようとした「ピクチャレスク美学」が起こり一時代を風靡することになる。自然と人工の複雑な関係の一側面である。

このような美学上の問題は文学にも影響を与えずにはおかない。イギリスでは18世紀から19世紀前半にかけて庭園は一つの文学モチーフとなった。ドイツでも18世紀後半からイギリス風景式庭園が導入され、それに伴って庭園は文学モチーフとなる。

## 2. 研究の目的

庭園とは「自然」と「人工」が交わる場である。また、芸術は「自然」と「人工」の間を揺れ動く。庭園は、ドイツにおいては、とりわけ18世紀後半、すなわちイギリス風景式庭園がドイツに導入されてから、文学モチーフとして用いられるようになる。本研究は、近代ドイツ文学（主に19世紀に成立した文学）に見られる庭園のモチーフの意味を、「自然」と「人工」の対立という観点から、個々の作家に即して明らかにすることを目的とする。また庭園モチーフは「自然」と「人工」を軸とするが故に、文学・芸術の自己理解にとって決定的な意味を持つ。本研究は、同時に、芸術の自己理解の歴史を解明することになる。

18世紀はルソーを挙げるまでもなく「自然」の時代であった。イギリス風景式庭園の成立とその文学モチーフ化の一つの背景である。しかし、庭園は「人工」の要素を含む。自然と人工がどのような関係にあるのかは、人工を人間理性と考えるとき、近代人をどのように理解するかという問いと密接に関係する。18世紀末シラーとFr.シュレーゲルが論じたのはまさにこの点である。自然と人工の関係はこうして19世紀を特徴づける人間学的、哲学的問題の一つとなったのである。

このような連関に置くとき、なぜ18

世紀後半から庭園のモチーフがドイツ文学において頻繁に見いだされることになるかが理解されるであろう。文学における庭園は作者の人間理解、そしてドイツ語で「人工」を表す語Kunstが「芸術」をも表すことから判るとおり、芸術理解が形象として現れる場である。人間において「人工」を擁護する者は、庭園を地上の人工樂園として描き出すであろう。その反対に「自然」を擁護する者は、イギリス風景式庭園を去り、大自然に理想を見いだすであろう。19世紀ドイツ文学はこの二つの極の間を揺れ動いているように見える。

本研究は、18世紀後半から文学作品に現れ始める庭園のモチーフを、1)なぜ特定の現実の庭園様式（とりわけイギリス風景式庭園）が選ばれ、また2)それが当該作品・当該作者によっていかなる芸術的意味を担わされているか、という点から考察する。もちろん、3)ノヴァーリス、ホフマンに見られるように「架空庭園」の歴史もドイツ文学にはある。これはこれで独自のジャンルとして研究の対象とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、庭園モチーフのディスクリス分析であるが、研究を遂行するためには、何よりもテキストの精密な読解が必要とされる。さらに庭園モチーフを研究対象とする以上、文化史的方法は必要不可欠である。

## 4. 研究成果

庭園及び庭園モチーフにおいては自然と人工の対立が問題となる。その好例をアイヒェンドルフ文学における庭園モチーフの一つに見ることができる。アイヒェンドルフの処女長編作品『予感と現前』に描かれるイギリス風景式庭園がピクチャレスク美学に基づいたものであり、その装飾過多の「不自然」の故に作者の批判の対象になっている。言い換えるならば、イギリス風景式庭園が「自然」を標榜して成立したにもかかわらず、それが必然的にもたざるをえない「人工性」の故に、自然ないしは自然美学という観点から批判されるという典型的な例をアイヒェンドルフに見ることができる。この理解からすればアイヒェンドルフが理想としたのは、「汚れなき大自然」ということになるはずである。ところがアイヒェンドルフ文学において哀

惜の念をもって懐かされるのはロココ整形形式庭園である。中編小説『誘拐』に挿入されている詩「王冠ユリと紅のぼたん」 - ロココ庭園が舞台である - を分析し、アイヒェンドルフの時間感覚を分析した。

アイヒェンドルフ自身はロココ趣味およびロココ庭園を揶揄しているにもかかわらず、詩「王冠ユリと紅の牡丹」ではロココの廃園 - 「時」の破壊力と過去の現前が同時に表現されうするには、これは廃園でなければならない - を、「時」がその本質を現す特別の場としていることを明らかにした。

庭園および庭園モチーフにおいては自然と人工の対立が問題になることには既に触れた。この問題をドイツ・ロマン派からパウル・シェアバルトまで追うことが次の課題であった。

この対立はドイツ文学において19世紀末、S.ゲオルゲの詩「アルガバル」(1891年)とH.v.ホーフマンスタール「私の庭」(1891年)において一つの頂点を迎える。一般にドイツ・ロマン派に始まる人工庭園の系譜(たとえばE.T.A.ホフマン)は、芸術の象徴としてゲオルゲの「アルガバル」に極まると関連研究は指摘している。しかし、本研究は、ドイツ近代文学における人工庭園のモチーフには二種類あり、一つは芸術の象徴としての庭園であり、もう一つがユートピア(=楽園)としての人工庭園の系譜であることを解明した。後者がノヴァーリスからシェアバルトに至る系譜である。

最終年度には、後者の系譜をとりわけノヴァーリスの未完の小説『ハインリヒ・フォン・オフトーディングゲン』(1800年)第9章の庭園描写とシェアバルトの「フローラ・モール」(1912年)を初めとする諸作品に現れる庭園描写に跡づけ、両者に共通するユートピアを指し示す表徴がノヴァーリスにあっては氷に反射する光であり、シェアバルトにおいてはステンドグラスを想起させるガラスを透過する「和みのある光」であることを明らかにした。

このことによって本研究が、ドイツ近代文学における庭園モチーフの研究に新しい知見をもたらしたとすることができる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

桑原聡「ドイツ近代文学における人工幻想庭園の系譜」Die Genealogie der phantasischen Kunstgärten von der deutschen Romantik bis Paul Scheerbart. 新潟大学人文学部紀要『人文科学研究』, 第128輯, 2011, 21-50,

桑原聡「クンストカマーの思想 - ノヴァーリスとザムエル・クヴィッヒェベルクのミュージアム論」Die Gedanken der Kunstammer - Novalis und die Musealogie von Samuel Quiccheberg, 新潟大学人文学部紀要『人文科学研究』第127輯, 2010, 1-35.

桑原聡「アイヒェンドルフ文学における庭園モチーフ」Das Gartenmotiv in der Dichtung Eichendorffs. 新潟大学人文学部紀要『人文科学研究』第125輯, 2009, 177-195.

桑原聡「音・響・歌 アイヒェンドルフ文学における天球の音楽のモチーフについて」Eichendorff und das Motiv der Sphärenmusik (査読あり)

「あうる〜ら」26号、2008、1 - 10.

[学会発表](計1件)

桑原聡「近代ドイツ文学における庭園モチーフについて - ゲオルゲ、ホーフマンスタール、シェアバルト - 」(日本独文学会北陸支部学会 2009, 11, 7、於新潟)

[図書](計 件)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:

取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桑原 聡 (KUWAHARA SATOSHI)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授  
研究者番号：10168346

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：